

資料渉猟余話

その119

一昨年、飯田市竜丘在住の木下和彦氏から父君木下右治先生(以下、敬称を略す)の日記等が南信州地域資料センターに寄贈された。その中に、標題二人の短い師弟交流がよくわかる日記(自大正十三年十一月三十日、至大正十五年十二月八日)があるので、その部分を探りだして紹介したい。

著名な島木赤彦(一八七六〜一九二六)は、諏訪出身の歌人であり、教育者

彦俊後は、アララギ・ヒムロ会員として、森山汀川・五味保義等の指導を受けた。その時の写真とともに、藪蘭会・かざこし会等の地域歌会の育成に努めた。その木下が、後年、

師島木赤彦と弟木下右治

〜若き日の木下の日記から①〜

鎌倉 貞男

年長けてから本紙(昭和四十二年一月)に発表している。

年長けてから本紙(昭和四十二年一月)に発表している。

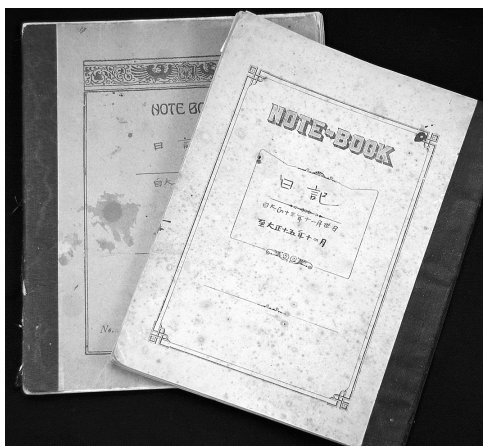


温泉寺の歌会(前列中央部、右から赤彦、文明、勘内、百穂、憲吉、茂吉)

年の木下の述懐によれば、この時はあま

み、その歌を日記に書き記している。それから間もなく、木下は同じ下伊那出身の先輩丸山東一に從つて下諏訪高木の赤彦宅(柿陰山房)を訪問し、直接歌をみてもらうようになった。晩年の赤彦は彼らを快く迎え入れ、西に諏訪湖を一望できる部屋で、一首ずつ丁寧に添削した。標題の日記には、前後四回の訪問が記されているので、以下にその概要を述べてみたい。

木下が赤彦から最初に直接指導を受けたのは、大正十四年一月二十三日である。当時、二人は諏訪



木下右治の日記

赤彦から直接指導を受けるようになったことは、木下にとつて実に幸せなことであり、自身の人生の中でも大きな意味を持つ。喜びを抑えた、淡々とした日記の書きぶりの中に、彼の高揚した気分を思ふべきであろう。

の高島小学校に勤務していた。時に、赤彦四十九才、丸山三十才、木下二十八歳。以下は、その日の日記である。(仮名遣いは、原文のまま)

諏訪山浦 冬早く雪降りければ 村人は落葉掻き得ず 年暮れんとす

―この歌甚だよと 言はる―

先生の歌評してもらひし事はじめてなり。甚だ良き事なり。毎日作つて持つて来いと言はる。勉強すべし。勉強すべし。(日記には他に四首記載されているが、ここでは赤鉛筆で〇印のある二首のみ記した)